

●「赤心」懸がん

Dream

五代塾

GodaiJuku

Sinbun (新聞)

第29号

発行: Dream 五代塾

吹田市千里山西 5-14-17

発行責任者: 理事長 川口 建



右: 友厚書画
好んで墨竹
を描いた

左: 豊子書画
好んで四君子
(蘭、竹、
菊、梅の4種)
を描いた



五代友厚研究の研究者を戦前、戦後と区分して調べると、戦前では五代友厚長女武子の婿養子・五代龍作、戦後では、宮本又次、宮本又次の長男・宮本又郎、吉満庄司、高村直助、田付茉莉子、八木孝昌、橘木俊詔の名があがってくる。今回は、五代龍作編『五代友厚傳』から五代友厚の人物像を探ってみた。

五代友厚研究の研究者

Dream 五代塾顧問 上村 修三

(五代友厚顕彰会世話人)

五代龍作編『五代友厚傳』

(五代龍作・非売品、1933年9月)

五代友厚の長男である五代龍作(1858年〜1938年)は、明治から昭和初期にかけて活躍した日本の実業家、工學博士である。



『五代友厚伝記』

『人事興信録』によれば、

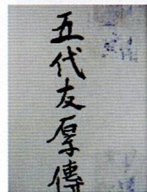
「和歌山縣士族高須兵太夫の二男として安政四年十一月に生れ、五代友厚の養子となり慶應(ママ)三年家督を相續した。明治八年外國語學校を経て、東京大學理學部機械工學科を卒業して明治十五年文部省より留學を命ぜられ、倫敦大學に學び後グラスゴーに於て實習し歸朝した。東京帝國大學工學科大學教授となり明治十九年辭して大阪に轉居し鑛業を經營し、後養父友厚の經營せし半田銀山にありて、其の發展を計り明治三十二年工學博士の學位を受け大湊興業、神戸棧橋各會社の重役であった。家族は友邦(長男、工學士、妻美恵子は工學博士野村龍太郎三女)、信厚(次男、法學士、古河商會社員、妻いさ、理學博士藤澤利喜太郎長女)、正友(三男、理學士、日本光學工業會社員、妻喜代、兵庫・會根増吉三女)。尚、孫には龍子(長男友邦長女)、五代友煥(友邦長男)、五代信作(二男信厚長男)、五代力次(信

厚二男)、則子(信厚長女)、五代正武(三男正友長男)」とある。

人事興信録には、慶應3年に家督相續したとあるが、恐らく、明治3年の間違いであろう。なお、五代友厚は明治3年1月、奈良県田原本・儒學者萱野恒次(通称・庸司)の三女豊子と結婚。翌年12月に、友厚長女武子が生まれた。武子は、1886年に九里龍作と結婚した。龍作は紀伊国(現・和歌山県)本宮の士族・高須兵太夫次男、大阪の両替商・叔父紀伊屋九里正三郎の養子となり大阪府平民となった。1875年に東京の外國語學校を卒業、1881年に帝國大學工學部を卒業。大阪製銅の技術者を必要としていた友厚の計らいにより、第4回文部省留學生(第1回目が1875年で、この留學制度(10人〜20人規模で最長5年。この頃は文部省が留學生の選抜に深く関与しており、文部省主導で留學生が選抜派遣され、帰国後は東京大學教授に就任することが多かった。)により日本の科学や鉦工業を担う人材が育てていった)としてロンドン大學で3年間機械工學を學び、1885年に帰国して東京大學教授になったが、五代家に婿入りして五代龍作となり、友厚の鉦山事業等を継いだ。龍作・武子の息子に法學士・信厚、娘に厚子(チツソ社長白石宗城に嫁ぐ)がいる。龍作・武子一家が暮らした友厚邸は1960年初頭に取り壊され、大阪科学技術センタービルとなる。友厚邸には、友厚のイギリス行きを支援した家老小松帯刀の妾・三木琴とその娘・壽美も小松の死後、同居していた。龍作は若い頃、嘉納治五郎(講道館柔道の創始者)の友人で、ともに天神真楊流柔術の福田八之助の門下生でした。1879年には、来日したアメリカ合衆國大統領ユリシーズ・グラントの前で、嘉納治五郎とともに乱取りの演武を披露した。また、五代友厚が設立に関わった大阪商業講習所(1880年)の後身大阪商業學校(現・大阪公立大學)の評議員の一人に名を

連ねるなど、父・友厚の志を継いで地域社会や地域學校教育の振興にも関わっている。

『五代友厚傳』は第十三章から成り、緒言、追録、年譜があり、六百九ページに及ぶ。



『五代友厚傳』は、龍作が左手で揮毫

第一章 少壯時代(一)家系(二)囊中の錐(三)長崎に遊學す(四)上海に渡航す(五)獨逸汽船を購入す(六)生麥事件(七)英艦鹿兒島に向ふ(八)英艦に捕はる(九)英艦の鹿兒島砲撃(一〇)英艦を脱して諸所に潜む

第二章 歐洲視察(一)留學生を率ゐて渡歐す(二)「モンブラン」と貿易商社の設立を協議す(三)世界大博覽會出品名義に關する一挿話(四)歸朝の期近づく(五)地中海に於て元旦を迎ふ

第三章 勤王時代(一)英艦の鹿兒島訪問(二)巴里特派使節・貿易商社設立の本契約成る(三)開關丸を各地に回航して藩の利益を圖る(四)討幕の烽火學ぶ

第四章 在朝時代(其ノ一)(一)備前兵の爭鬭事件(二)堺事件(三)英公使襲撃事件

第五章 在朝時代(其ノ二)(一)大阪開港―外交、貿易、條約一切の事務を管掌す(二)外國人の不正行為を糾弾す(三)電信、鐵道布設に關する外國人の請願を拒絶す(四)松島遊廓を設置す(五)雁燕去來(六)小管修船場竣功す(七)銃器彈藥の買入に奔走し外資借入に努力す(八)大阪造幣寮の設立と軍艦の買入に奔走す(九)東上して財政の事を議す

第六章 挂冠下野(一)薩摩に於ける武勳派の跋扈(二)部下の留任嘆願と交友の至情(三)爲替會社、通商會社の設立を策す(四)鹿兒島に歸へる(五)再び大阪に出づ(六)報國の道自ら他に在り(七)櫻の宮に花を賞

す(八) 小松帶刀の死と森有禮の洋行
第七章 手腕伸ぶ(一) 金銀分析所を開設す
(二) 鑛山經營と弘成館創設(三) 半田銀山の沿革(四) 半田銀山行幸(五) 井上馨の先收會社を指導す

第八章 野に在りて重きを爲す(一) 政府頻りに改革を策す(二) 廢藩置縣の斷行(三) 岩倉大使の海外派遣(四) 近衛兵の紛議(五) 久光政府の施設を憚ばず(六) 征韓論の破裂(七) 喰違見附の變(八) 民選議院の建白

第九章 大久保利通の智囊(一) 佐賀の亂(二) 久光西郷を説く(三) 臺灣征伐(四) 大隈重信の短所缺點を苦諫す(五) 古河市兵衛をして志を成さしむ(六) 大阪會議(七) 棋客來り晝伯訪ふ(八) 大久保利通兇手に仆る

第十章 實業界に活躍す(一) 製藍事業を興す(二) 朝陽館行幸(三) 堂島取引所を再興す(四) 大阪株式取引所を創立す(五) 大阪商法會議所を設立す(六) 天下の疑惑を解く(七) 大阪商業講習所を設立す

第十一章 閣議の大問題(一) 財政意見書(二) 米納論

第十二章 相踵いで事業を興す(一) 東京馬車鐵道株式會社を創立す(二) 關西貿易社を創立す(三) 大阪製銅會社を創立す(四) 阪堺鐵道會社を創立す(五) 神戸棧橋會社を創立す(六) 汽船會社の合同を策す

第十三章 終焉及び逸事(一) 發病(二) 敏勳の御沙汰を拜す(三) 英魂天に歸す(四) 阿部野の塋域に葬る(五) 逸事

半田銀山臨幸

「大久保内務卿巡検記」

『五代友厚傳』第七章(四) 半田銀山行幸では、半田銀山の鉱毒対策などが当時の鉱長吉田市十郎記述「大久保内務卿巡検記」に詳細にまとめられている。第一回東北巡幸の際、1876年6月21日に福島県半田銀山(1873

年に官営鉱山に指定、翌年には五代友厚に払下げられ民営鉱山として再出発)に明治天皇が臨幸された。先遣隊として大久保利通がその前年に半田銀山にやって来ている。歴史的にみてこの稀有な産業奨励のための半田銀山臨幸は、つぎのように意義深いものがある。

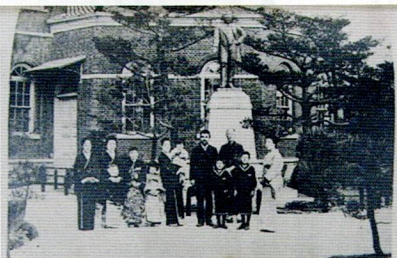
五代友厚はフランス人鉱山技師F・コワニールと薩摩藩士以来からの親交が厚かったことから、コワニールの指導により技術も、熟練労働者もすべて兵庫県生野銀山に依存して半田銀山操業を開始したが、鉱山から排出される濁水が稲苗を害するとして、隣接諸村から操業停止の要求が出され頓挫した。五代友厚は現状打開のために、直接的対策として、①三力所の沈澱池を設置してこれに排水を導入し、石灰を投入攪拌して流出させる措置をとる。②工

部省鉱山寮と生野のコワニールに濁水と沈澱物の分析を依頼し、「この水は neutral reaction にして、植物に何らの害を及ぼさない」ものだとする報告書を提示した。また、東北巡幸の先遣をつとめていた大久保利通を半田に立寄らせて、明治天皇の半田銀山臨幸をえることができて、最終的には天皇の御稜威をもって、鉱毒事件を解決することができた。

第十三章(四) 逸事には、なぜ半田銀山臨幸の折、鉱長吉田市十郎が明治天皇を案内したのかが次の如く記されている。

「君(友厚)は恩義に報ゆるの念極めて篤し。往年(1863年)英艦を脱して吉田

六左衛門(武州熊谷奈良村大字四方寺(現埼玉県熊谷市))で代々の名主。なお、吉田家は、戦国期に



龍作の家族と遺族写真。中央が龍作・武子夫妻、左端は五代豊子。明治 33 年堂島の商業會議所・五代友厚銅像前。

忍藩主の成田下総守長康に仕え、忍城落城後の天正期に四方寺に土着した)の許に潜むや、六左衛門が遇することの厚かりしを想起し、後年其の養子吉田市十郎を聘して半田銀山の鉱長たらしめたるが如き其の一例なり。」

『五代友厚傳』末尾には、「公利公益の爲には、毫も出費を惜まず教育、慈善、救恤の爲めには、又た喜むで多くの寄附を為せり。」とあるように、五代友厚はまさに公利公益の人であった。

森山履道軒

森山茂(萱野茂)の師

Dream 五代塾会員 森山治

(横浜在)

五代友厚の妻・豊子の兄・森山茂の事績については以前、「五代塾ニユース」と本紙に少し書きました。(本稿末紀参照)

茂は大和の萱野恒次の長男で後に大坂の森山藤次郎の養子となり森山家を継いで明治維新後外交官として朝鮮との国交樹立交渉に尽力し、退官後は元老院議員、富山県県令、貴族院議員などを務めました。が、明治維新前の活動についてはよく分かっていません。

人名辞典の森山茂

・文久元年菅沼一平と称して京坂に出て国事に奔走、ついで森山履道軒の後を継いで森山茂となった。慶應三年幕府の図書頭平山敬忠の使節として韓国に赴こうとする際にこれに随行を求めたが平山はむしろ鬱陵島の開拓を勧めたのでまさに赴こうとするとき王政復古の政変となって果たさなかった。『明治維新人名辞典(吉川弘文館) 日本歴史学会編』

・天誅組の変に参加したことがあり、当時は菅沼一平の変名を使っていた。韓国問題に関心を抱き、鬱陵島への移住開拓計画を進めていたが維新で中止となる。『幕末維新人名辞典(學藝書林) 監修 奈良本辰也』

尊王攘夷の志を持ち天誅組に参加する一方で、徳川幕府外国惣奉行の平山敬忠に朝鮮への随行を求めるといふ、相反するものとも思える記載となっています。

森山履道軒の後を継いだという事は、師弟関係があり影響を受けたと思われるが、履道軒がどの様な人物であったかの資料もなかなか分かっていませんでした。

この度、偶然にも森山履道軒が著した書物の存在に辿り着くことができました。

一つは「法書」という書物で大阪天満宮御文庫に、もう一つは『傍訓千字文』で国文学研究資料館に所蔵されています。

巻末には青蓮院宮直弟 森山履道軒」と記され、落款が押されています。

『傍訓千字文』(国文学研究資料館所蔵)

出典：国書データベース

<https://doi.org/10.20730/200013931>

この書物を元に、素人考えを巡らせてみましたのでお付き合い頂けたら幸いです。

私は浅学

で『傍訓千字文』がどのような書物か認識していませんでした。

国文学研究資料館に問い合わせをしたところ、

親切にも『傍訓千字文』、『青蓮院宮』



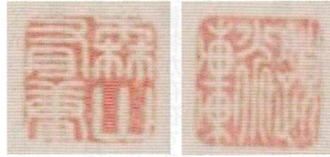
『傍訓千字文』 国文学研究資料館所蔵

さらに『落款』について以下の事柄を教えてください。だく事ができました。

『傍訓千字文』…その名のとおりに『千字文』に字訓を振ったもの。『千字文』は『日本古典文学大辞典』(岩波書店1984年)を引用すれば、「上古より現今まで広範に流布してきた初歩教科書」であり、「近世に至っては(中略)寺子屋でも往来物とともにテキストに採られ、国民教材と称しうるほどの普及の実績を示した」とあり、『千字文』が広く教科書として使われていた。加えて、「明治以降の近代になって、小学校ないし中等学校で習字教科書として採択するところが少なくなかった(後略)」とあるように、習字の教科書としても活用されていました。

『青蓮院宮』…江戸時代後期に青蓮院宮(しゅれんいんの宮)と称された方は、尊真法親王(1744~1824)と久邇宮朝彦親王(1824~1891)がおられます。

『落款』…落款を解説するためのツールがある事を教えてください。



落款の拡大画像

先ずは、ツールを使用して落款の文字を解説する事を試みました。右側の落款は残念ながら解読することは出来ませんでしたが、左の落款は「森山有庸」の文字を確認する事ができました。

茂の養父藤次郎(朗)とは別人の名前となりましたが、この名前には見覚えがあります。

森山家の墓(大阪)

阿倍野斎場にある森山家の墓には三人が眠っていますが、その中の一人が有庸(履道軒)です。

この墓は明治38年(1905)、森山茂が津

留乃の死去に伴い阿倍野斎場に造営したものであることが墓地使用許可書の記録からわかります。この時に藤次郎、有庸の墓石も移設されたのでしよう。茂は有庸についてもしっかりと認識していた事を確認する事ができました。茂は五代友厚の眠る瑩域の近くに移動したのでしよう。また大正5年に妹豊子、弟萱野真と相談して、奈良県田原本町の実家萱野家の墓域を、やはり五代友厚・豊子夫妻の瑩域の左側に移しています。

但し、茂が有庸の後を継いだとするのには少々無理があると思われます。有庸の墓石には歿年が安政2年7月15日(1855)と刻まれています。この年茂は未だ14歳です。有庸の後を継ぐには若すぎるのではないのでしょうか。有庸の没後に藤次郎が履道軒の後を継ぎ名乗った可能性はないのか、このような事があり得るのかの検証についてはこれからの課題したいと思います。

次に青蓮院宮はどなたか? 改めてお二人の生歿年と有庸の歿年を確認してみました。

●尊真法親王…1744年3月3日~1824年4月16日

●久邇宮朝彦親王…1824年2月27日~1891年10月25日

●森山有庸…不明~1855年8月27日

青蓮院宮が尊真法親王であった場合、『傍訓千字文』は1824年以前に著された事になります。尊真法親王は、「書道に優れており、『入木道十七条之口決』『入木抄口決』などの著作がある。」(ウィキペディア)との事で、有庸が、書道の教科書に類する書物を著した際に青蓮院宮の弟子であると記した事は肯けます。生歿年から判断するとかなりの年齢差があったものと思われます。

青蓮院宮が久邇宮朝彦親王であった場合、朝彦親王は1852年から青蓮院宮と称されることになりましたので傍訓千字文は1852年から有庸が歿する1855年の僅か3年の間に著された事になります。又、1852年、朝彦親王の年齢は28歳でしたので、有庸が朝彦親王の弟子であるとすれば恐らくは年下であろうと推察され、30歳前後で若くして亡くなった事になります。

尚、青蓮院宮がどなたであったかの考察からは外れますが、茂の養父である藤次郎は有庸没後の僅か7年後の1862年(明治維新の6年前)に他界しています。その時、藤次郎の妻・津留乃が28歳であったことを照らし合わせますと、藤次郎もまた30歳前後で亡くなったのではと推察します。



有庸の墓石

左から、森山津留乃(藤次郎の妻)、森山先生(藤次郎)、森山有庸の墓石

久邇宮家

『傍訓千字文』と云う書物の種類から青蓮院宮は尊真法親王である可能性がとても高いと思われますが、久邇宮朝彦親王である可能性を否定する根拠もありませんので、どなたであったかを特定できるまでには至りませんでした。

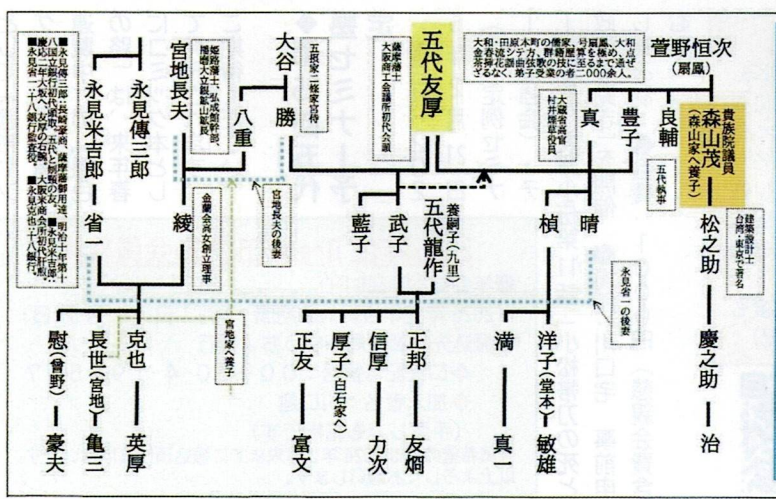
久邇宮朝彦親王である可能性も僅かながら残るとした理由(思い入れ)としては、茂の長男松之助と朝彦親王の第3王子邦彦親王との関係があります。松之助は台湾で多くの官庁建築を設計した建築家ですが、台湾での仕事を終え帰国した後に久邇宮邦彦親王邸を設計しています。(久邇宮家は香淳皇后のご実家で昭和天皇にお興入れする際はこの御殿から発たれました。現在でも聖心女学院の校内に現存し「パレス」と呼ばれ親しまれています。)

朝彦親王と弟子・履道軒(有庸)の関係が藤次郎、茂にも保たれ、次の代の邦彦親王と松之助にも引き継がれた結果、松之助は御殿の設計を担う事になったのかもしれない。

さらに、久邇宮朝彦親王と面識を得た茂は、朝彦親王と密接な関係にあった薩摩藩の志士と交流する機会を得たのではないかと想像を膨らませることになりました。

朝彦親王は、薩摩藩、会津藩などと共に文久3年(1862)、「八月十八日の変」を起こし攘夷過激派を排した中心人物で、これにより天誅組の討伐にも繋がったとされます。人名辞典の中には茂が「天誅組の変に参加」と記載するものもありますが、朝彦親王の弟子と称する人物に繋がる者が天誅組の一員になると思えません。

五代友厚の姻戚系譜



公武合体派の朝彦親王との関係があったからこそ、茂は幕府の外国惣奉行の平山敬忠に朝鮮への随行を求める事も可能だったのではないのでしょうか。

維新後には、薩摩藩の方々との交流を活かし、元々興味があった朝鮮との外交に関わる新政府の仕事に携わる事になったのではないかと考えます。

有庸、藤次郎の歿年を見直す事で、天誅組の變の前に藤次郎は他界し、茂は既に森山家を継いでいたはずと云う事も類推できました。これも天誅組に加わっていなかったと云う推測を補強するのではと感じました。

荒唐無稽な想像を膨らませ、一部人名辞典の記事をも否定する内容となってしまうましたが、森山履道軒が著した書物が存在する事を知り、改めて森山茂について考える事ができました。

いつの日か、さらなる資料と巡り会い、歴史に詳しい先生よりお話を伺える機会があればと願っております。

主な参考資料…

- ・曾野豪夫『五代友厚と妻豊子(奈良出身)と兄貴族議員森山茂(講演録) 奈良新聞社主催(2017)』
- ・森山慶之助『森山家について(五代友厚の妻豊子の長兄の家系)』五代塾ニュースVol.10(2020)』
- ・堂本洋子『豊子大祖母の木像』五代塾ニュースVol.11(2020)』
- ・金春安明『桐蔭森山茂』五代塾ニュースVol.11(2020)』
- ・堂本敏雄『我が家でお宝発見 五代友厚の「竹の絵」のお軸』Dream 五代塾新聞第11号(2022)』
- ・森山治『朝陽館上海売捌所 五代豊子の兄森山茂が協力』Dream 五代塾新聞第12号(2023)』

Dream 五代塾活動状況

◆五代友厚顕彰墓参会

9月25日(水) 大阪市設南霊園において16時から墓参会(五代友厚公歿140回忌)を開催した。



14時、大阪取引所集合。徒歩で大阪商工会議所・企業家ミュージアムへ移動。両会場で恒例となっている五代友厚展が開催中で、墓参の前に訪問し見学した。

墓参会では今年も沢山の報告ができた。五代さんは、

1867年開催のパリ万博へ薩摩藩単独での参加に尽力、1876年米国フィラデルフィア万博に製藍と原葉の出品で褒賞状を受賞と縁が深い。その万博が今大阪で開催中である事、また、半田銀山(桑折町)の五代友厚再興事業顕彰をシンポジウム・展示会・関連イベントが一年を通じ実施されている事、テレビ大阪では五代友厚特番が放送された。しかし、昨年末に当塾顧問で『新・五代友厚伝』の著者八木孝昌氏が急死されたことは悲しい報告となった。八木先生は『新・五代友厚伝』を2020年に発刊。その後引き続き五代さんが悪徳政商と長く汚名を着せられた「開拓使官有物払い下げ事件」の名誉回復と教科書記述訂正を実現された。私たちの胸のモヤ



モヤが晴れた事が思いだされました。(昨年の顕彰墓参会に八木先生は参加された)その後、五代さんとは無二の親友の「小松帯刀」銘柄の焼酎で献杯し墓参会を終了した。墓参後は懇親会会場に移動し、皆さんで楽しい時間を過ごした。

◆第24回五代塾セミナー実施

10月18日(土) 定例セミナー(勉強会)を開催した。テーマは「半田銀山と五代友厚と桑折町」

桑折町は町制施行70周年を契機として産業・歴史・文化などの記念行事を積極的に開催している。



歴史的には独眼竜に繋がる伊達氏発祥の地とし14代植宗、15代晴宗が桑折西山城を中心としてこの地を統治した。後に17代政宗(仙台藩祖)に繋がる。また、奥州・羽州街道の追分として交通の要衝・桑折宿としても栄えた。

また桑折町周辺の地形は、扇状地の台地が広がっているが、水利が乏しく農地に不向きであった。しかし西根堰の構築で新田開発が進み豊かな水田に生まれ、米沢藩の財政再建に貢献したようだ。この土木遺産は現在も利用されている。一方、阿武隈川沿いの乾燥地は桑の葉を餌にする養蚕業が盛んな場所と知られ、明治になり生糸が日本の主力輸出品目となると、全国屈指の養蚕地帯として君臨した。ただし明治末期頃には養蚕不況となり、桑畑を果樹、主に桃やりんごに植え替え、現在では桑折の桃は皇室・皇族へ献上する産地として「献上桃の郷」として商標登録され全国に美味しい桃が出荷されている。半田銀山と五代友厚については本誌では割愛しますが、お知らせ



として『週刊ヤングジャンプ』隔週連載中の「銀色の路」は、来年春にコミック本として発行されます。ご期待ください。

◆第25回五代塾セミナー予定

●日時: 2026年2月21日(土) 定例セミナー(勉強会) テ

ーマは五代友厚小伝第11話「小松帯刀の死と政局の動き」を開催
し込み制 ●会費: 1000円(懇親会費含む)

2026年度 Dream 五代塾会員募集

- ①年会費: 2,500円
(2026年度年会費対象期間: 1月1日~12月31日)
- ②振込先: 郵便局・ゆうちょ銀行
◆口座記号番号: 00920-4-198557
◆加入者名: 川口建
(手渡しでも結構です)
会員希望の方は2026年2月末までに振込頂ければ幸いです。以上よろしく申し上げます。

編集後記

一年が早い早いと毎年の言葉だが、本当に年々早くなる。大阪関西万博はネガティブな前評判を跳ね返し、後半になるにしたがい大盛況となり、今は万博・マクマククロスの人々も出るようになっていよう。何より嬉しいのは子供たちが楽しんで世界の国々や、化学、物理、医学IPS細胞などに興味を示し次世代へと繋がっていくであろうことに大きな意味があることだと思う。第二回パリ万博で、薩摩琉球、佐賀、幕府と世界に向けて日本の素晴らしさを伝えていたからこそ今の日本があるのではと思う。100年後その先にどんな日本が世界の中で咲き誇るのだろうか? 楽しみだ。

今年も Dream 五代塾をご支援頂きありがとうございました。来年度も変わらぬご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。(由美子記)

(連絡先: 川口建)

・Email: gogoken12345@gmail.com

・Tel: 080-4497-5688

・HP: <https://www.dream-godai.com>

